



閑度雜談

上

15
1259
1



15
1259
1-3

梅善 中郎弘毅輯



閑度雜談 三冊

年々強人介風一書の中郎善微魯
おもい出る本し拙き筆不出何ん支
て春の日秋乃夜志中むりはるれる
茶話りりそあくそんふ

閑度雜談序

梅善先生乃人を教給ふ類之人の人々たる
べに有用に學有りて其の才力は先り
あつて其の志も亦其の才力に比して其の
つとむる所の如きいふゆゑ人の心をさす
物語の種おもく年々強人よふれ多し世の
るどもと志すべし其の才力は先り
るが如きものふるゆゑ世も亦其の才力に

健 15
2243 1259
1-3 1

閑度雜談卷之上

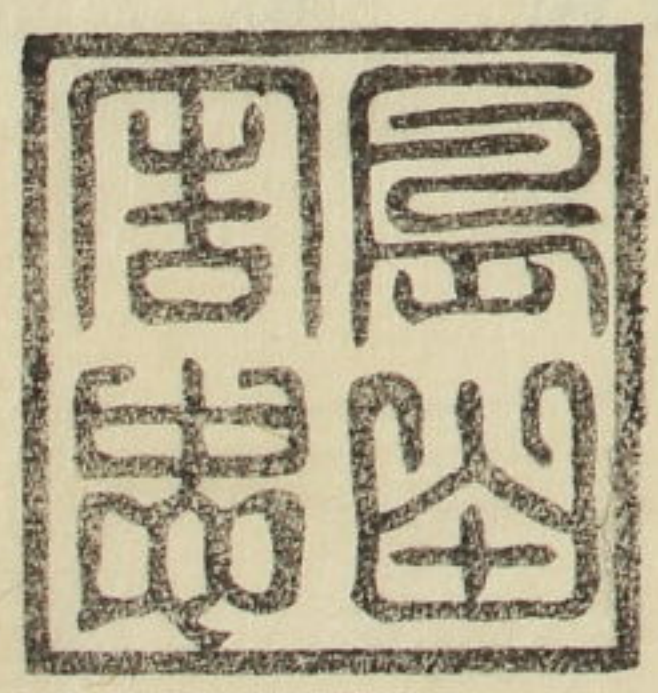


書肆のりく宛ともしりし給えざりしを、周忠
あはとらきく、形そつりたきく、も後くれ
作と物詠、野史の多ぶるも、勅徳ふとらづら
るなり、おれ書りしより、善をとり、悪をたし
教誨の意を會き、先生、津より人とあは
まらるも、まこと言乃外は、著るけきば、見ん
人れあは、後よりく、大り益あづけた書し、い
つる、故り松圃先生ふらると、先生おあひて

是を書肆、某おはづけいさかきうと巻
けり、まかいさうい、

嘉永元申の歲

門人 嶋田周忠



閑度雜談上卷

目錄

伏見に漁老

郡山乃盗人

津の妖怪

白牛

太鼓に堪能

禅僧の狂歌

楓木

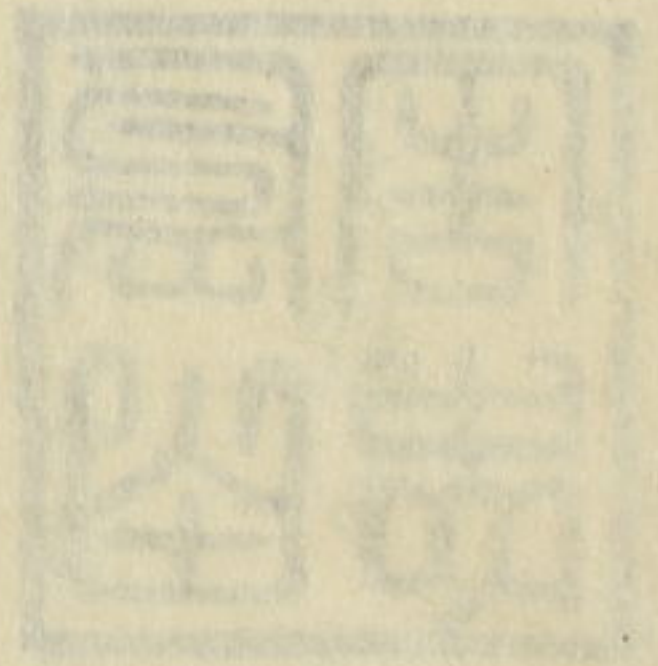
變成男子

景清に靈

小太乃五輪塔

菅神の靈夢

傾城に好斗



人性忌嫌ふて心

積聚園とく

大徳の徳
 徳の徳
 徳の徳
 徳の徳
 徳の徳

徳の徳
 徳の徳
 徳の徳
 徳の徳
 徳の徳



閑度雜談上卷

年あけの人へ聞くの中、おのれおのれも、拙な
 筆よ如きはる光り、春は日秋乃夜を、居むし
 備へり茶けおのれ備へり

梅美 中村弘毅輯

○伏見に漁者乃はるか、十一月小雷鳴りては、明
 年、好くも多く魚をとりて、むすしんを傳

ふ考へも、果しくあつるといふ

○紀州府庫より長一間半ほどの朽木あり、楓木とい

ふ、いふほどの早ゆも、此木より一点に泥土をぬり、長櫃よ

れさ失、早損の地をともらめが、いふれば、たちまち雲起

る、雨大よるも水出く、いふく田地をそこちよ、いふれ

時、いふも、寛政丙辰の年、大早せ、いふば、村よりあり

いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

雨大よる、田地いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

○いふのあり、や、京師下河、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

和州郡山、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

と得く、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

閑度新語卷第一

むとへつらう事よくやあらんうとある人のふりあり

○寛政壬子年江戸村山某の家此少婢年十六なるが

病久しくふす腰痛甚しく後腰より足りりし

瘡大なる一明年夏よりりと病ましく愈し忽ち

一と男子と変トよりけの侍とく供ふもははりし

其變成男子を見たり一人まきとてある老儒よりき

○勢刃津の堀某とては士の家あり妖怪なるを衣服

とわれと衣厨とて家のうらとめぐりりたあづの器も

動きをてりけはれどは武勇の人かや人妖怪も

たそふしや家ののらうらハ晝夜もをきりたり

主外に出ぬきはうけはて妖怪をりけりけりけり

ふりて一月のりりりりりりりりりりりりりりりり

失ふりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

児女子まともはもろろろろろろろろろろろろろろ

とあつれめぐるりりりりりりりりりりりりりりり

やうふたりりりりりりりりりりりりりりりりりり

○和名園原村、河の家のりませふすめの中り、らと余
友人いづ写らしうらく、示しさんしと其まゆらるらく、た

日向國の内いと、御方ご巡見じゆん乃のははく、沙汰寺さと申ま立
景清けい此こ古墳こへまうらく、感慨かんののららり、旅宿りゆうふふ
手て向むれれ歌か短冊たんへへああてて矢や加かのの寺僧ていくく、持もせせききれれは
へへ老人らう出でくく、ううけけのの書がをを使つかののくく、ら途と中ちゆう
くく、ああらら見みるる、ううけけるる人にんのの名ならら、ささへへゆゆるる

昔むかしと、寺てら中ちゆうりり、左ひだり極ぎやくのの老人らうなりり、ああらら短冊たん乃のらら、
一ひと向むかへへ、おおとと、おおののおお、おおののおお、おおののおお、
奥おくへへ返かへりり、おおのの歌うたのの、景清けい亡な霊れいのの歌うたやや、
子こののああらら、其その手て向むかれれ歌うた、
年とし乃のくく、くくののやや、おおのの水鏡みづけけきき、ううらら、
ととゆゆるる、
けけくく、
いいけけきき、ううらら、ああらら、

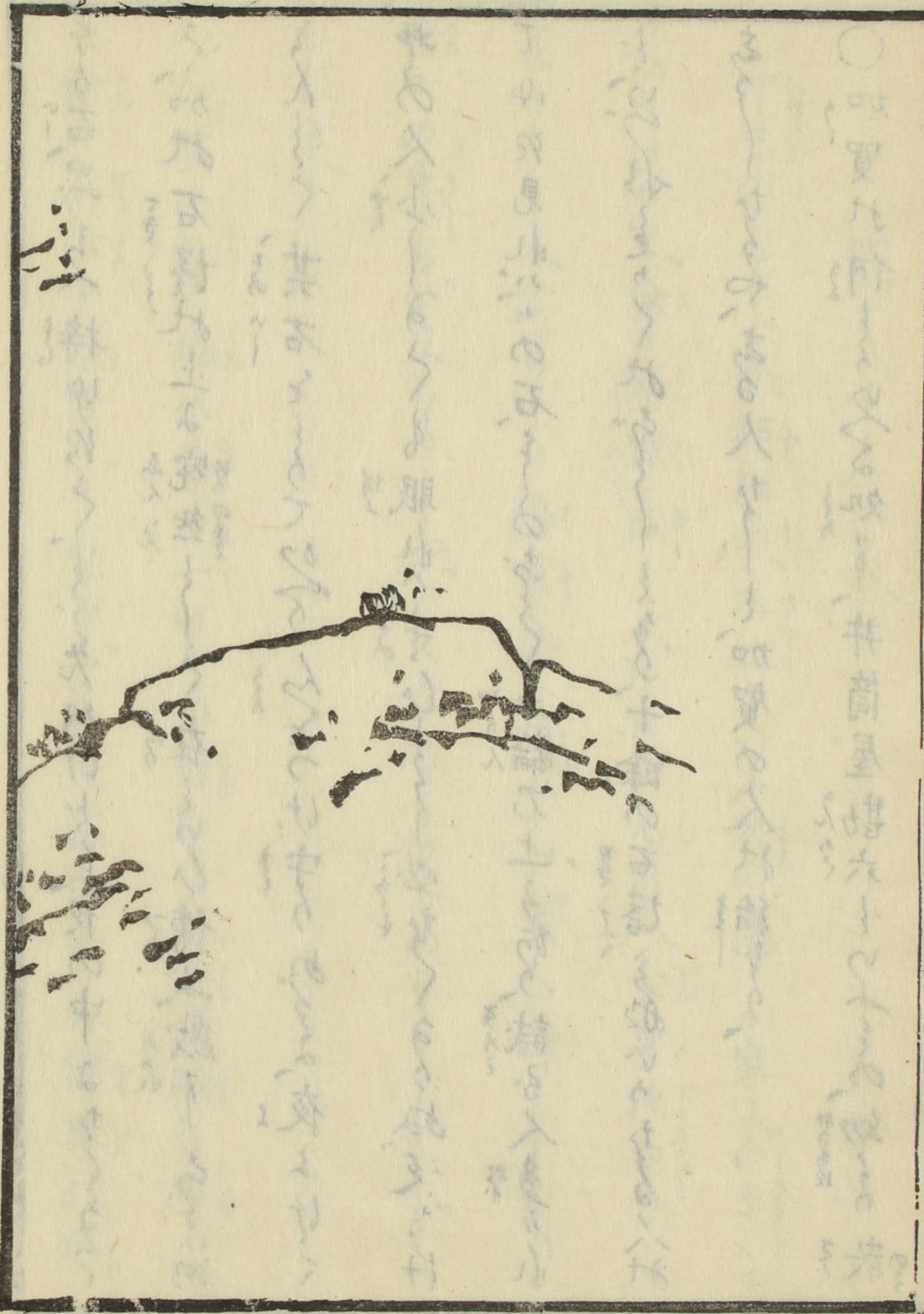
代くそ久しに

○丁巳のころ、春都北西、木辻より処の酒ふる家、白牛の
くひたけり、余が外甥、聞しり、ゆれて見ふ、全身純白、
甚うらうし、ゆらゆら、得來すや、問ふと、主人辞し、
後その牛をいふなり、やいと、うづう、たのめなり、
ら北き、

○加賀小松の城北、一むの竹、少し高き、
五輪の石塔十餘あり、その中、一つの五輪の上なる、寶珠、
形

なる石、いづれも、持ゆ、
く、加賀石塔、上、宛然、
らん、其石をとりて、
おの、人、少、も、眠、
て、ゆ、見、水、
と、お、水、
志、
○加賀、何、
井筒屋、
幼、
散

開原新談卷第十



樂がくれ太たい鼓ことつらつを母ははと寢いん食じくより一いつつかぢかりしうば
 けのよ其その妙たうと得えたり人ひと皆みなひあつる時とき船ふねも海うみを
 つらしとありしよ好あむ所ところのよれなきを太たい鼓こハ身みとて船ふね
 ど持もつりとてよけりか岩いとよまねし人ひとのり船ふねの車くるまを舟ふね
 とままりとくゆしとゆす船ふね人ひとうらちあげておる悪あ魚いさな此
 此この舟ふねと負たつるなり船ふねとくろぐとく人ひとくしとくろく
 はんくろくすやハ、まゝい、のまゝくサチうら今いまを獨ひとりよりてと浅あ
 ましとく此このは念ねん仏ぶつしと人ひとと文ぶん青あおくまりとくりよとて船ふ
 船ふ

中ちゆう此この人ひともねねろれちひきりぐせんと周しゆう章ちゆう一いつ色しきとあけり
 ちきけろぶ、勘くわん六ろくも自じ若じやくとく太たい鼓こと取とりておは世よの名な
 残ざんり、うらそ死しちんもの一生せうの精せい力りきときハ死しぶらとあけ
 て、大だい唱ちやうありともよ、一いつ聲せいうら下くだはき聲こゑ天てん小せうむら海かい底てい
 延えん徹てつとくきこえしよ、たや此この舟ふね忽たちちうとて出いけ
 此この船ふね人ひともろび蘇そ生せいやとちのく、大だい力ちきとえ急きゆうよ櫓ろ
 とを立たし、ほのり恙つかなく、思おもふ凄しみよとてとちん、
 ○いつのちろろ、西せい陣じんよ絹きぬとて、業わざとく世よとて、

ものゆゑ不孝のゆゑうらつたに、窮乏甚しく、いまはいつとも
 もせんまゝく、ねらふれいへ、関東よある人あると力く
 の方よゆきりよとしく身をとてんと思ひこち、家財を
 うりて路費し、夜よほぎぬと旅立し、江戸とけし下
 ろし、か蹴上よりと、忽ち思ひ出し、けし年ごろ、北野天
 満宮を信ど、日よままうで、江戸よありなば、まゝ春拜
 せん事うぬひがさし、ければ御いぬどひ、且生涯のなごりい
 まうせん、く、さちよ足と入し、うて、お京より、北野の祠



よりのよ、まご夜あつく、門とぎし、うらむれが、あよりおまへ
 と、門外よぬらた、誠心とあし、うらむ、夢うつし、もつらざし
 く、いりの人し、ひあて、さうや、いり、歌れ下句とねひり、
 ぶ乃男つぬよ歌、し、ゆなれた、い、はく、ち、此句とえて、
 甚りや、し、思ひなが、う、の、ま、う、く、ま、東よむらひ、木
 曾路よつきく下る、日とかき、ひてう、千の峠の、ゆりたる、驛舎り
 宿す、ゆ、く、く、うら、さん、と、さ、る、足、の、く、は、居むし
 をえず、其日と、ね、ま、ま、ま、ま、り、ぬ、同、く、駅、り、ひる、諸侯や

得^レヤ^一下^ノ句^とは^たぬ^れバ^一首^連續^して^た歌^とな^り
 う^れる^天の^御神^汝が^多年^の信^心よ^めで^させ^ぬ人^を不^幸
 と^勝て^んか^ら生^涯と^安ん^だか^ら免^れん^から^うく^ハ
 ち^り一^筋の^なら^ぬい^づぐ^神を^いづ^くま^なし^奉ふ
 べ^に即^坐ま^の男^小縁^とま^の家^臣の^列小^加へ^びひ^し
 ある^老人^くも^は

○^之も^お柳^を某^とら^る打^もの^あせ^る老^を
 深^きま^を好^く求^業の^間は^専ら^修り^し得^るなり

或^日適^之の^僧柳^屋店^に来^りて^あら^し
 打^物を^あせ^しと^んく^一つ^の毛^後と^手よ^ら
 て^まぬ^毛ぬ^きと^らぬ^から^ぬ柳^屋
 憤^りと^も亦^し禪^僧中^へ兼^りたり^て禪^氣
 ぬ^や各^々其^の毛^後本^来空^{しく}あり^しを^や
 禪^僧言^下ふ

あ^らし^しと^らぬ^毛後^柳が^見せ^し
 見^えぬ^から^ぬ一^首の^狂哥^と誦^し右^の毛^後を

持去し〜あし

○享保の頃や田所町の名主傾城を請出し箱の
 書とあり借免のかけ〜いあし〜彼妻常ん馬
 し算筈は朝夕錠とあらし人よよとほ〜せ〜
 引出し〜あし〜夫も深くかく〜し〜るを夫とえ来
 勤めり〜中〜深く〜色〜尋〜れ〜も〜り〜に〜
 漆〜舌〜り〜り〜強〜疑〜ひ〜尋〜れ〜バ〜彼〜妻〜據〜あ〜と〜さ〜
 あ〜申〜す〜ら〜大〜金〜と〜り〜〜我〜身〜と〜請〜出〜し〜給〜ふ

と身のを慰めんといふ〜あし〜右引出し〜んせ申
 さん〜ん〜あ〜ん〜の〜慰〜も〜薄〜く〜あ〜ん〜の〜紙〜思〜は〜く〜包〜
 ら〜る〜が〜疑〜玉〜り〜ん〜せ〜と〜引〜出〜し〜ん〜せ〜
 ら〜る〜に〜案〜よ〜お〜遣〜し〜袈〜裟〜鉢〜等〜の〜佛〜具〜あり〜夫〜大〜に〜驚
 出〜る〜の〜あ〜ん〜も〜尋〜れ〜バ〜さ〜し〜は〜よ〜我〜身〜の〜勤〜め〜の〜初〜め
 馴〜れ〜し〜男〜あ〜し〜が〜浮〜川〜竹〜の〜中〜あ〜ら〜づ〜俱〜に〜死〜と〜誓〜ひ
 り〜れ〜右〜男〜と〜あ〜し〜の〜壯〜年〜あ〜く〜身〜ま〜り〜ぬ〜其〜目〜よ〜う〜あ〜ん
 出家と心得〜れ〜と〜親〜方〜抱〜の〜身〜を〜色〜を〜終〜了〜を〜成〜か〜く〜

傾城の事おまへ表へ笑を銘り国房の戯きとやうにし結ぶと
 らも出家淨身と專とせしむら身請出し書し給へ是又
 大金は我身と賣しるは色は軒安内を色目に出さげと
 涙あぐり諸うまへ夫を涙と流し扱き奇特ある女のぬれ
 名の志きく男あつと情自惚めらあり眼をさすまへ
 出家得及怒くしとあられがあら有ぐとし涙もむせん
 て悦びく我も大金あり請出せし汝あまとも汝めら度
 とめんじ且右衛門と聞き妻よありひつら面白かき早く

その程おと招き判髪さぐしとあられがあら有ぐと
 り甲のぬれぬれさうかきハ三界家るし今百うわを
 しく露命と難しを戒行冥を中とそれ連一お見さす眼と
 乞何國ともあり立出さるゆへ夫も外の人おあつし
 女うぬと是のぬれとあられが暫延とく餘り遠かぬ
 乙女の女髪結の書とあつてそとくもや曲論別傳
 紹末の老あきくあきく級中合せおけりて夫の眼をさすひ名
 審夫とま婦よありしとらう実傾城は実あしとらう後

引競へ思ふに此も人への語りき

○享保の頃御先と勤し鈴木伊若角の橋（中）百合の花と

婿の（中）或の縁會ふては五人集りし折柄吸物如く河を

も箸と糸（中）に伊若角の舟を結ぶも色も悪く箸もとら

ざる故河も柳子と舟（中）小若此吸物の百合の根もと無

哉と云ふ（中）悪く婿も知りて右の舟も音もあつて

後段（中）子及ぶより一庭の内膳小百合の繪書くるも多る人

跡も早建引替りぬべえのち快くあつしと松下陽次

語りぬ亦土屋能くも家末樋口小学と云医師有しが風を
嫌ふよりそあま嵐の居るなまよそい果（中）つて柳子と知り
くる或自空く相續し（中）学版招振舞り小学とも招くる
小小学物より来りし故兼く彼ら風塔の余り足取あり
や何事よりや斗をがどしとく嵐の居るをと求め小学の居
る事の下に入る（中）志すね顔ありお侍に似たり小学
来りし故後座を譲り右の事く是れ所を後版招びし
く多る小学物より顔色悪く身よりぬせとあつし甚

不快の好子申や何ゆと何事もやう々に後投あつたは
 の好子も大角のつりね中ゆきだ打果しもせん乳色好何れも
 口を冥極是介抱し海宅のつりとくらむ故人あど付て送り
 帰しうらむ去あくも不思儀の嫌ありさく程ぬく人と
 怒し極み死守らんるゝ病のゆうてゝ河の流るもあさ
 よし其岸の連うし同家の匡山本字地流うし
 ○近江頃のつりや馬道にふおのりあつる常の積露を
 熱いころがそまゝなるに随所の舟子近隣の老ふ兼て物多ハ

我死せば火葬すし河年腹中の積露を打碎りありてし
 後未の人積と熱く助養のも辰ふもあつんと是々中
 て身まがりぬお送言ふやうせそ死骸と境々ふ骨中
 三塊あり則積塊ありさくさく舟子そ外も集うて後積成
 石をぬく打し神も不祥千樹百斗あせも破是は折節
 古老未うさそ次と字ふよ不審と思ひよれ持くる杖をぬて
 寤るわいニツニツ小破るる皆し不審よ思ひ破さしると集め
 石鉄槌等あつ打し始のさく神も破まを杖さく叩かれが

